

【真昼のアユタヤー駅】

英語の案内は全くない。タイ人の動きをみて外国人ツーリストは動く。ホームは一線だけ。線路から直接乗り込むことになる。



駅前の食べ物の屋台。同行者が焼き飯を買ってきた。安くて旨い。駅に向かってくる中国系タイ人



僧侶のための優先席。
使うな表示。車内販売のおばさん



【車窓風景】



耕作放棄されたと思える広大な農地が広がる。ここよりバンコクに近づくにつれて、こうした土地に工場進出が見られるようになる。



田舎町の駅（バンコクへ1時間程度）駅前風景は日本と変わらず。広場にバス。



【バンコク・ファランボン駅に到着】

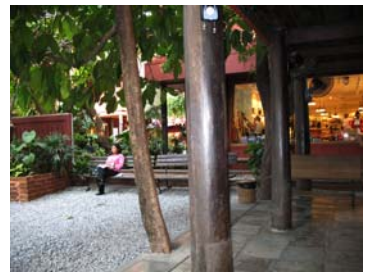
ファランボン駅は本線から少し入りこんだ袋小路。上野駅のような終着駅の雰囲気。





ジムトンプソンの家

ジムトンプソンがかつて住居としていた家。チーク材を使って建てられた古いタイ伝統様式の家屋6軒分を使い、組み立てなおして作られた。展示されている武術品は見るべきものが多い。古美術の発掘欲は並大抵のものではないと言われる。都心とは思えない静けさ。バンコクの異空間である。





【後記】

thai—lao 2週間余の印象に残る旅であった。

旅行中、見聞きしたことについて、その印象を映像を交えながら、思い着くままに記したものである。

貧弱なこの地域に対する知識、加えて脆弱な洞察力である。

十分なものにはならなかったこと、折角の機会であったのに残念である。

印象記と言いながら、場合によっては、断言的に言い切っている部分がある。ご批判の上、ご教示いただければ幸いである。

なお、まがりなりにも、自分なりの印象をイメージとして形成出来たのは、現地語をあやつり、現地実情に通じる同行者、バンコク在住の家族に負うところが大きい。感謝申し上げます。

February 2007 Takuji Maekawa



ジム・トンゾンハウスは、タイの古い建築様式を多く取り入れ、チーク材でできた家を6軒トル集めて造られたものです。大部分は100年から200年以上経っており、そのうちの何軒かはタイの古い都アユタヤから川を下って運ばれたものです。昔の建築法に従って復元しましたが、随所に彼の建築家としてのアイディアが生かされています。古い様式に従って中で、シャンデリアだけが電化されています。しかし、このシャンデリアも、18世紀ならびに19世紀のもので、すでに富裕な貴族の家にはありました。ジム・トンゾンハウスの建築にあつてはこの国の風習に従って占い師が必要な宗教上の占いをしました。

6番地 ソイカセムソソ 2 ラマー世通り バンコク

毎日 AM 9:00 — PM 5:00

この家は1959年の完成後まもなく一般に公開されました。展示品は昔のタイのもの場版でなく、周辺諸国の古美術品も含まれています。彼は1967年3月26日、マレーシアのキャメロン高原で休暇中、謎の失踪をとげましたが、いまだに手掛もつかめていません。

一般公開以来、ハウスの収益金はバンコクの盲学校の為につかわれています。尚、毎日日本語ガイドがおります。それに、毎週火曜日の午前中は日本人のボランティアがガイドを行っております。

1976年にジム・トンゾンの法定管財人はタイ王国の省庁からジム・トンゾンの名を冠した財団設立の認可を受けました。トンゾンの資産は財団の所有となり、その邸宅と美術コレクションは現在、私設博物館として公に登録されています。財団設立の際の認可状によって、財団はジム・トンゾンの永続的な権利を擁護し、タイの豊かな文化遺産の維持、保存のために貢献、専念するものです。

